



ソウル駐在員通信

vol.15

クレアソウル事務所 所長補佐 飯村恵理子

안녕하세요(アンニョンハセヨ)! クレアソウル事務所の飯村です。

さて、私が執筆する駐在員通信は今回が最後になります。

今回は、ソウルで活躍する茨城県出身の方に、特別インタビューを行いました!

ソウル茨城県人会の会長を務めてくださっている博報堂チェイルの秋葉一雅様は、茨城県水戸市のご出身です。高校時代までを水戸で過ごされた後、米国、東京、上海、ソウルなど世界を舞台にご活躍されています。

そんな秋葉様のグローバルな視点から見た茨城県について、伺ってみました。

【博報堂チェイル 代表理事社長 秋葉一雅様 (ソウル茨城県人会会長)】

〈茨城県在住歴〉 高校卒業までの18年間 (水戸市出身)

〈ソウル在住歴〉 4年。ソウルの前は上海に8年間勤務。



(ソウル特別市麻浦区の博報堂チェイル社長室にて撮影、インタビュー)

ー 本日はお時間をいただきまして、ありがとうございます。

はじめに、簡単に御社のご紹介をいただけますか?

博報堂チェイルは、ごく簡単に言うと韓国市場に向けたマーケティングと広告の会社です。最近では、これまで主流だったテレビや新聞などの媒体に加えて、インターネットやモバイル領域での仕事も増えています。

クライアント様の業界としては、化粧品、金融、スポーツ用品、食品など多岐にわたります。社員数は60名ほどで、日本人駐在員は私だけです。

ー 秋葉様には、2013年のソウル茨城県人会発足当時から会長を務めていただいておりますが、発足から現在までを振り返って、県人会にどのような印象をお持ちですか？

ソウル茨城県人会は、茨城県出身の駐在員や韓国居住者だけでなく、韓国から茨城に留学経験のある人など、「茨城」という軸のもとに様々な人が交流できる場として、よい機会を提供できているのではないかと思います。

このようなご縁の中で、業種、年代、経験を越えた多彩な方々が気軽に交流できる場であるとともに、茨城県に関しても最近のトレンドや情報を共有できる楽しい場になっていると感じています。

ー ソウルでは、他の県人会や生年別の集まり、同門会（大学の同窓会）など多様なモイム（韓国語で「集まり」）がありますが、その中において茨城県人会はどのような存在でしょうか？

そうですね、いい意味で敷居が低くて(笑)、このように茨城をネタに集まれる機会があるのはいいことだと思います。ただ、せっかく参加しやすい雰囲気ですが、まだまだ認知度が低いので、今後はまだ茨城県人会を知らない人にも参加してもらえるように、機会を広げていけたらと思っています。

ー まだ巡りあえていない茨城県ゆかりの方がたくさんいらっしゃると思うとワクワクしますね。ところで、最近茨城にはどのくらいの頻度で帰省されていますか？

上海勤務の頃はあまり帰れなかったのですが、今は年に3、4回くらいは帰省し、お墓参りなどに行っています。

ー 昔と比べて、茨城のここが変わったなあと感じる場所はありますか？

最近、Facebookを通じて、何十年ぶりかに地元の友人と連絡を取るようになり、実際に会う機会がありました。その待ち合わせ場所が勝田駅だったのですが、30年振りくらいに訪れましたが、いつの間にか綺麗な新しい駅舎になっていて驚きました。それでも、友人曰く「10年以上前だよ」と(笑)。昔は木造の平屋建てだったのですがね。

ー そんな時代があったのですね。私は今の駅舎しか知りませんでした…。

たまに帰ると、それなりに、と言ったら変ですが(笑)、昔と比べたらかなり変化しているし、新しくなっている部分も多いなと感じます。

一方で、昔からあった商店街などは、お店を閉じてしまったりそのまま何もない状態になっている所が多いように思いますね。街の密度が薄くなっている、というのでしょうか。駅など一部の施設は新しくなっても、昔ながらの街の空気というか、人と人とのつながりのようなものが、以前より感じ取りにくくなっている。そこがとても寂しい感じがします。もちろん、水戸や茨城だけの話ではないと思いますが。

ー 確かに、水戸駅周辺でも商店の跡地が駐車場になるパターンが増えていますね。

私自身も、以前住んでいた実家は住む人がいなくなって処分してしまったのですが、そこは空き地になってしまっています。そのような人も多いのではないのでしょうか。

ー はい、まさに私も祖母の家がそのような状態です。

世代交代がされた後、そこからすっぽり何かが抜け落ちたままになってしまっているのが、やはり寂しいですね。たまに帰ると、特にそのようなことを感じます。

ー そうですね。建物は変わっても、そこに住む人々の生活というか、人と人とのつながりが色濃く残っていると、たまに帰省しても「ああ、帰ってきたな」という感じがするのかなと思います。有機的なつながりは街の元気には必須ですね。

長く海外生活をされている秋葉様から見て、茨城県に求められる世界スタンダードというか、こういう部分をもっと伸びればいいな、ということはありませんか？

茨城空港にくる海外からのお客様が増えていると思いますが、そこから東京方面に行ってしまうのではなく、少なくとも1泊くらいは県内を楽しんでもらうようになればいいですね。

ただ、水戸駅周辺など一部の地域を除いては、あまり宿泊施設の数が多いように感じます。特に、海外からのお客様が安心して宿泊できる、ある意味ではがっかりしないレベルのホテルって、本当に限られているのではないかと思います。

ー ここソウルでも、新しいホテルが次々にオープンしていますし、旅行口コミサイトなどで簡単に世界中の宿泊施設と比較されてしまいますよね。

そうは言っても、そんなにホテルばかり増やすこともできないし、需要と供給の問題ですから、難しいとは思いますが。ですから、農家民宿とか民泊、ホームステイなんかをもっと増やして、お祭りや花火大会などのイベントで需要が増える時に対応できるようにしたらいいんじゃないかと思いますね。

ー 実は私が県で最初に勤務した部署では、グリーンツーリズムの推進に関する業務を行っていました。県内でも農家民宿の優良事例はたくさんあるのですが、まだ一般の旅行者には浸透していないかもしれません。農業体験が目的の場合に利用されるのが主流だと思います。

そうでしょうね。目的に縛られずに、例えば農家の大きいご自宅の余ったお部屋を使わせてもらうだけでもいいと思います。

茨城は魅力度が最下位だと言われてはいますが(笑)、外から見れば、茨城ののんびりした空気を感じ取れるだけで、付加価値になると思いますよ。そういう部分に県外の人に触れられる機会が増えてくれるといいなと思います。

ー 確かに、茨城の新鮮でおいしい農産物で作った朝ごはんが食べられるだけでもすごく魅力的です。

こういうことは、行政だけがやるのではなくて、県民一人ひとりが意識できるようになるといいですね。

せっかく茨城空港があって、イミグレーションも短時間で料金も安い、と利便性も高いのですから、世界に繋がる窓口としてもっと機能してほしいですし、茨城県全体がそれを受け入れる意識を持てるといいのではないかと思います。

私の周りでは、茨城出身で、まわりまわって茨城に戻ってくるUターン組はよく見るのですが、いわゆるIターンとして県外から入ってくる人ってあまりいないような気がします。退職した人が田舎暮らしをするとか、移住の受け入れも進んだらいいですね。

ー そうですね、県もちろん、各市町村において積極的に取り組んでいます。

きっと、県民のみなさんも、本音ではもっと外からくる人をウェルカムしたい、でもやり方が分からない、っていう人が多いのではないかなと思うのですよね。

ー そうかもしれませんね。

それで立ち止まってはもったいない。もっとオープンに外からの人を受け入れる環境が整うことで、茨城県のブランド力もあがるのではないかと思います。

交流によって発展することもある、ということを、もっとみんなで考えていけたらと思いますね。

そういう意味でも、ソウル茨城県人会のような外部のネットワークが、茨城と世界との接点を作るきっかけになって、そのような接点がどんどん増えていったらいいなと思います。

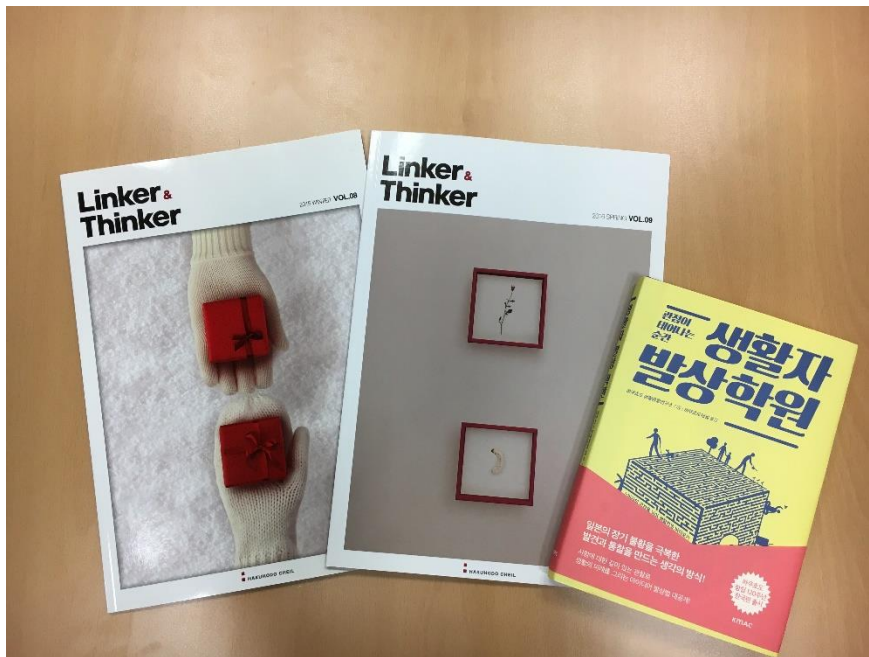
ー そのような役割を果たせるように、ソウル茨城県人会もこれからますます発展させていきたいですね。

30年以上茨城を離れていて、日本からも12年以上離れて生活していますが、若いころには気づけなかったけれど、今外から見ると、茨城にはまだまだ活かしきれていない部分が多いと感じています。首都圏ではあっても広大な土地がある。まだまだ茨城でできそうなことはたくさんあると思います。

海外の県人会などのネットワークが情報交流の場として機能し、そこから世界への門戸が広がっていくと、茨城県も変わっていくのではないかと思います。

ー 今日は、茨城への熱い思いをたっぷりお伺いすることができました。ありがとうございました！

インタビューをさせていただいたにも関わらず、最後におみやげをいただけてしまいました。秋葉会長、本当にありがとうございました。これからも茨城県の応援をよろしくお願いいたします！（韓国語の本、頑張って読みます…）



（博報堂チェイルの社報と「生活者発想塾」の韓国語版をいただきました。）